

# 江馬修『羊の怒る時』と関東大震災における 社会主義者弾圧

## —『台湾日日新報』との関係からの考察—

江口 真規

### 1. はじめに——作品概要、作者略歴、問題提起

#### 1-1. 作品概要

江馬修（1889～1975）『羊の怒る時』<sup>いか</sup>（1924～1925）は、1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災の被災体験に基づいて描かれた小説である。この作品は1924（大正13）年12月14日から翌年3月30日にかけて『台湾日日新報』夕刊に連載後、1925（大正14）年10月東京で単行本として刊行された。

『羊の怒る時』のあらすじは次のようなものである<sup>1</sup>。東京府下代々木初台に住む作家の語り手は、妻子と昼食をとっていたところ地震に見舞われ、近隣住民とともに屋外に避難する。翌日、朝鮮人が暴動を起こしているという噂が近所から伝わり、一家は室内に隠れ不安な一夜を過ごす。次の日、彼は兄の安否を気遣い本郷に向かうが、至る所で朝鮮人や社会主義者と間違えられ、危うく暴力を振るわれそうになる。語り手はその夜から近隣住民によって結成された自警団の夜警に参加しつつも、朝鮮人留学生で知り合いの蔡君の身の危険を案じ自宅に匿う。浅草区長を務める兄とともに浅草寺、吉原周辺の罹災状況を見学する模様も描かれる。

犠牲となった朝鮮人を弔うための追悼会を間近に控えた10月下旬、語り手は洋行帰りの友人と震災について話し合う。友人と別れた後、彼は「柔和なる羊を怒らすこと勿れ。羊の怒る時が来たら、その時は天もまた一緒に怒るであろう。その時を思って恐れるがよい」（256）と独り言をつぶやき、作品の幕が閉じられる。

#### 1-2. 江馬修 略歴

著者江馬修については、特に関東大震災との関係に注目した以下の略歴（筆者作成）を参照されたい<sup>2</sup>。以下、傍線部は筆者による。

1889（明治22）年 岐阜県大野郡高山町（現高山市）に生まれる（本名修<sup>なかし</sup>）。

1909（明治42）年 斐太中学を中退後、上京。区役所等で働きながらフランス語

の夜間学校に通い、創作活動を開始。

1911（明治44）年 「酒」（『早稲田文学』）を発表。

1916（大正5）年 『受難者』を新潮社から単行本として刊行。ベストセラーとなる。

1923（大正12）年 関東大震災に際して代々木初台の自宅で被災。

1924（大正13）年 『羊の怒る時』連載（～1925年）。

1925（大正14）年 『羊の怒る時』刊行。

1926（大正15／昭和元）年 渡欧、パリに滞在。

1927（昭和2）年 帰国。プロレタリア芸術連盟に加盟。

1928（昭和3）年 プロレタリア作家同盟に加盟。『戦旗』編集員となる。

1932（昭和7）年 弾圧を避けるため高山に帰郷。『山の民』執筆開始。

1935（昭和10）年 郷土研究雑誌『ひだびと』創刊、「赤木清」の名で考古学論文を発表。

1938（昭和13）年 『山の民』（飛騨考古土俗学会）刊行（～1940年）。

1946（昭和21）年 日本共産党に入党（～1966年）。

1947（昭和22）年 『山の民』（隆文堂）刊行、『血の九月』（関東大震災関連作品）刊行。

1949（昭和24）年 『山の民』（冬芽書房）刊行。

1958（昭和33）年 『定稿 山の民』（理論社）刊行。

1964（昭和39）年 「ゆらぐ大地」（関東大震災関連作品）発表。

1967（昭和42）年 中国作家協会の招待により訪中。

1973（昭和48）年 『江馬修作品集1・2 山の民』（北溟社）刊行。

1975（昭和50）年 東京都立川市の自宅で死去。

### 1-3. 問題提起

「忘れられた作家」<sup>3</sup>とも称される江馬修の作品研究については、明治維新时期における飛騨の百姓一揆を扱った『山の民』（1938）<sup>4</sup>に関するもの以外の考察は数少ない。その中で『羊の怒る時』についての先行研究をみると、石牟礼道子が「極限事態の群衆心理」<sup>5</sup>を鋭く描いた作品と捉えているように、関東大震災下の緊迫状態、特に朝鮮人虐殺事件における集団心理を巧みに綴ったルポルタージュとして評価されている<sup>6</sup>。しかし、この作品が『台湾日日新報』（以下、『台日』と略記）に掲載されたという作品発表の背景は看過されてきた。

本稿では、『羊の怒る時』がなぜ『台日』に連載されたのか、その理由を、台湾日日新報社と江馬との関係、および江馬のプロレタリア文学作家としての経緯、と

いう観点から探り、社会主義者弾圧事件の諸相を伝える作品としての意義を探る。

## 2. 『台湾日日新報』に掲載された事由

『羊の怒る時』の初出紙については、これまで作者自身によって『台湾新聞』『台湾日報』などと混同されてきた経緯があるが<sup>7</sup>、実際には『台湾日日新報』であったことが確認されている<sup>8</sup>。

ここで、『台湾日日新報』の概要について触れておこう。『台日』は、1898（明治31）年5月～1944（昭和19）年3月の期間に発行され、「台湾最大御用新聞」<sup>9</sup>とも呼ばれた日本統治期最大の台湾総督府系日刊紙である<sup>10</sup>。内地の東京、大阪を含む11の支局があり、特に台北本社には最新型の印刷機や製版機が整備され、総督府系の出版物の印刷を一手に引き受ける機関でもあった<sup>11</sup>。文学面については、大正期から朝夕刊の連載小説として内地の作家、特に大衆作家の作品を掲載したことが特徴として挙げられる<sup>12</sup>。

戦前に発表された江馬の長編小説は、『受難者』（1916）以来、書き下ろしとして発表されており<sup>13</sup>、連載は自分の執筆姿勢に適さないと江馬は考えていた<sup>14</sup>。この点を考慮するならば、なぜ『羊の怒る時』は『台日』に連載されたのかという疑問が生じる。この理由について以下で考察することとする。

### 2-1. 台湾日日新報社東京支局記者としての江馬修

まず、『台日』に発表された江馬修の作品と関連記事について確認すると、江馬が台湾日日新報社東京支局<sup>15</sup>の記者であった可能性がうかがえる。

【『台湾日日新報』（1898～1944）に発表された江馬修の作品と関連記事】

- ①1921（大正10）年7月7日第4面：〔新刊紹介〕江馬修「お牧」『小説倶楽部』7月号
- ②1921（大正10）年12月31日第6面：〔台日講話〕江馬修「「新しい」と言ふこと」
- ③1924（大正13）年6月3日～6月7日、夕刊<sup>16</sup>第1面：江馬修「或る温泉場で」（全5回）
- ④1924（大正13）年12月14日～1925（大正14）年3月30日、夕刊第1面：江馬修『羊の怒る時』（全104回）
- ⑤1931（昭和9）年2月24日第3面：〔新刊紹介〕江馬修「新時代の少女達」『令女界』2月号

上記のうち、①、②、③、⑤については、先行研究でまとめられている江馬の著作年表<sup>17</sup>には記載が無く、江馬の作品として知られていないものである。この中で江馬の評論が掲載された②の記事末尾には、「東京支局一記者」と記されている。江馬の自伝および従来の研究でまとめられた経歴<sup>18</sup>では全く触れられていないが、この記事が掲載された1921（大正10）年12月の時点で彼が東京支局記者であった可能性があり、これを機縁に『羊の怒る時』が連載されたのではないかと推測される。

## 2-2. 江馬修のプロレタリア文学作家としての経緯

次に、上記①で紹介されている短編小説「お牧」に注目してみよう。この小説の内容からは、『羊の怒る時』掲載の背景にプロレタリア文学作家としての江馬の活動と紹介が兼ねられていたものと考えられる。

まず、江馬のプロレタリア文学作家としての活動経緯を辿りたい。江馬修は、妻との出会いから結婚までの苦悩を描いた自伝的小説『受難者』の人気により、「ヒューマニズム作家」<sup>19</sup>としてその名が広まっていた。しかし、1926（大正15）年の渡欧から帰国後は、プロレタリア芸術連盟・作家同盟への加入<sup>20</sup>や、その機関紙である『戦旗』（1928-1931）編集委員としての活動など、プロレタリア文学作家としての側面が顕著になる。『羊の怒る時』単行本序文では、このような左傾化の契機が関東大震災の経験にあったことが次のように述べられている。

昨年[1924年]の一月及び五月に出版した長篇小説「極光」に於いて、自分はインターナショナリストとしての自己の立場を明らかにした。そして「羊の怒る時」も或る意味で同じ立場から書かれたものと言える。しかし、同じインターナショナリストとしても、その頃の自分はやはり「受難者」以来の観念論者である事に少しも変りが無かった。ところが、「羊の怒る時」を書き終える頃から、自分は思想上に一大変化を経験した。そして自分はマルクス主義者となった。(1)

このような発言とその後の作品群から、江馬のプロレタリア文学作家としての活動は関東大震災以後であり、『羊の怒る時』は彼の思想的転換を示す記念碑的作品であるとみなされてきた<sup>21</sup>。

しかし、『台日』においては、1921（大正10）年に「お牧」が紹介されることにより、江馬のプロレタリア文学作家としての側面がいちはやく伝えられていたと考えられる。ここで、「お牧」の作品概要について確認してみよう。この小説は、貧

しい家庭に生まれ髪結いとして働く女性お牧の経済的困窮を描いたものである。父の大怪我によって明日の生活の糧さえもが危ぶまれる中、お牧は幼馴染の従兄弟を養子にもらうよう家主から勧められる。彼女は、この結婚によって貧困から抜け出すことができるとわかってはいるが、好きでもない従兄弟との結婚の勧めを断り、これまで以上に労働に励むことで困難を切り抜けようと決心する。お牧を中心に、電線工場の労働者が集まる「貧乏長屋」<sup>22</sup>での「働いても働いても、働き切れないやうな暗澹とした明日の生活」<sup>23</sup>への不安を描いている点で、江馬自身の経歴を素材として描かれた同時代の他の作品<sup>24</sup>とは異なり、階級問題への意識が明確にうかがわれる内容となっている。

「お牧」が発表された1921年頃は、江馬の「ヒューマニズム作家」からプロレタリア文学作家への変化の過渡期といえるだろう。先述したように、江馬は、関東大震災をきっかけに「マルクス主義者となった」と自身述べている。しかし実際には、それ以前の1920年前後から「社会主義について、また革命の問題についてまじめに考えてみるようにな」<sup>25</sup>り、マルクス主義に関する様々な書物の訳本を読んで勉強していた<sup>26</sup>。また、1920（大正9）年頃に転居した代々木初台の自宅近くには、『種蒔く人』（1921－1924）<sup>27</sup>や『文芸戦線』（1924－1932）同人としてプロレタリア文学の発展に中心的役割を担った青野季吉（1890－1961）が住んでおり、彼の家にも頻繁に出入りしていたという<sup>28</sup>。このような中で、『台日』では、プロレタリア文学作家としての江馬の揺籃期作品である「お牧」が紹介されたことで、この作家の新しい側面が強調されることになったといえる。

上記のように、関東大震災に至るまでの江馬のプロレタリア文学作家としての経緯と「お牧」紹介の背景を考慮するならば、『羊の怒る時』は、関東大震災における社会主義者弾圧事件に関する情報伝達という役割を担っていたと考えられる。この点について、『台日』における関東大震災の報道と作品中に描かれた弾圧の様相と合わせて、以下の節で考察していく。

### 3. 『羊の怒る時』に描かれた社会主義者弾圧の諸相

#### 3-1. 『台湾日日新報』における関東大震災「三大テロ」の報道

震災下の東京では、地震や火災の被害によって新聞の発行が困難であった上に、内務省、警察、軍隊による情報統制が行われていた<sup>29</sup>。特に規制されたのは、関東大震災の「三大テロ事件」<sup>30</sup>ともいわれる朝鮮人虐殺事件、甘粕事件（大杉栄殺害事件）、亀戸事件についての報道である。各事件の概要と報道規制内容は以下の通りである<sup>31</sup>。

(1) 朝鮮人虐殺事件：9月1日に関東大震災が発生すると、横浜を起点に朝鮮人の放火・投毒・来襲などの流言が広まった。翌日東京に戒厳令が布かれると、軍隊・警察や自警団は朝鮮人を狩りたて、集団的に殺害するなどの残虐行為が行われた。虐殺された朝鮮人の数は定かではないが、6000名以上が犠牲になったともいわれている。朝鮮人暴動の流言の発生源については、軍隊、警察、市民など諸説あり、未だ明らかではない。

- ・記事掲載差止め日：9月3日→解禁日：10月20日
- ・東京中央各紙<sup>32</sup>における初出記事掲載日：9月3日『東京日日新聞』
- ・『台湾日日新報』における初出記事掲載日：9月7日

(2) 甘粕事件（大杉栄殺害事件）：9月16日、アナーキストの大杉栄（1885～1923）・伊藤野枝（1895～1923）夫妻と大杉の甥である橘宗一（1917～1923）が、甘粕正彦（1891～1945）率いる東京憲兵隊麹町分隊に殺害された事件。甘粕らは軍法会議で裁かれたが、3年で仮出獄した。

- ・記事掲載差止め日：9月20日→解禁日：10月8日
- ・東京中央各紙における初出記事掲載日：9月20日『時事新報』号外（発禁処分）
- ・『台湾日日新報』における初出記事掲載日：9月20日

(3) 亀戸事件：軍隊・警察が亀戸で労働運動家・社会主義者を虐殺した事件。9月3日夜、亀戸署は当時革命的労働運動の拠点となっていた南葛労働組合の川合義虎（1902～1923）ら8人と、元友愛会活動家で純労働者組合の平沢計七（1889～1923）ら2人を検束し、朝鮮人も含めて700余名を拘留した。以上の10人は4日未明にかけて署内で習志野騎兵連隊兵士によって殺害され、同様に自警団員4人や朝鮮人も殺害された。事件は1ヶ月余後に公表され、遺族や自由法曹団などが真相究明に取り組んだが、戒厳令下の軍の行動として不問に付された。

- ・記事掲載差止め日：9月20日→解禁日：10月10日
- ・東京中央各紙における初出記事掲載日：10月8日『時事新報』号外
- ・『台湾日日新報』における初出記事掲載日：掲載なし

姜徳相、山田昭次による先行研究では、東京から離れた地方紙では記事の差止めが十分に機能しておらず、東京で発行された新聞と内容・時期の差が見受けられることが指摘されている<sup>33</sup>。『台日』における甘粕事件の報道についても、9月20の事

件発覚と同時に内務省から記事掲載禁止命令が出されたにも関わらず、「大杉栄検挙さる」と題された記事が掲載されており<sup>34</sup>、差止めの不徹底が見受けられる。

しかし、先述したように「御用新聞」としての性質が根強い『台日』が、厳格な情報規制の対象に組み込まれていたことは明らかである。特に亀戸事件に関しては、記事掲載解禁日である10月10日以降、内地新聞では号外等含め一斉に報道された<sup>35</sup>にも関わらず、『台日』ではそれ以降も全く記載がない。

そのような中で、江馬修の『羊の怒る時』は、『台日』において関東大震災下の社会主義者弾圧について言及している数少ない文献の一つであることを、次節で示していきたい。

### 3-2. 『羊の怒る時』における社会主義者弾圧についての言及

『羊の怒る時』において、社会主義者弾圧について触れられている箇所を確認したい。

まずはじめに、地震発生から3日後の夜、近隣住民とともに見回りをしていた語り手が、武器を携えて町を歩く男を目にする場面である。

この時、武器や兇器をもつことは警察から堅く禁ぜられていたのであるが、誰もそんな布令に耳を貸さなかった。見るがよい、どこかの職人らしい若い男は刺子の火事装束をきて、大刀を抜身にして無暗に振まわしながらこうなっていた。

「主義者でも、朝鮮人<sup>× × ×</sup>でも出てくるがよい、片っぱしから斬って捨ててやるから。」

「本当だよ。もし大杉栄<sup>× × ×</sup>なんかいたら、頭を叩き割ってくれるがなあ。」  
(165) <sup>36</sup>

この武装した男の言葉からは、朝鮮人だけではなく、大杉のような「主義者」、つまり社会主義者や無政府主義者もが暴力の対象となっていることがわかる。この後に続く場面では、近所の巡査がアナーキスト高尾平兵衛（1896-1923）<sup>37</sup>の殺害に触れ、「こないだ社会主義者の高尾平兵衛が殺されたろう。（中略）例えば主義者だって勝手に殺していいという法は無いんだからね…」（167）と発言しているように、当時の社会主義者弾圧の背景がうかがわれる。ここでは、朝鮮人への無差別的な暴力と社会主義者弾圧という二つの残虐性が重ね合せられているのである。

次に、『羊の怒る時』には、甘粕事件と亀戸事件についての言及がある。上記の引用では大杉栄の名前が挙げられているが、大杉が実際に殺害されたのは9月16日

であり、語り手はこの甘粕事件や亀戸事件の発生を新聞を通して知るのであった。そのときの場面は次のように描かれている。

震災のために新聞が出なくなってから、自分達はそれを見る事にどんなに飢え渴いたろう。そして[9月]十日前後になって、漸く焼け残った「報知」と「都」と「東京日々」とが出初めた時どんなに貪るようにして隅々まで読んだ事だろう。とは言え、またしても震災の記事で殆んど全部を充たされている新聞は、わけても実地に震災を経験したものにとっては、余りに刺戟が強すぎた。(中略)

そして新聞で委しい事実を知れば知るほど、今度の災禍が自分の知っているよりも、また想像しているよりも遙かに大きく、そして残忍で深刻なものだったことを知って驚かずにはいらなかった。

葛飾に於ける社会主義者十三名の銃殺事件、大杉栄外二名の絞殺事件、その他知られる事なくあちこちで犯された同様な暴力、それらについて自分は今何にも言うことを控える。こうした事件は当時いずれも自分の魂をどん底まで震撼させたものだった。(251-252)<sup>38</sup>

ここでは、大杉の殺害とともに、亀戸事件について「葛飾に於ける社会主義者十三名の銃殺事件」としてはじめて語られている。確認される限り、『台日』におけるこの事件への言及は、新聞廃刊となる1944（昭和19）年3月までこの一箇所のみである。

### 3-3. 社会主義者としての語り手の恐怖

先述したように、『羊の怒る時』は、朝鮮人虐殺事件を目の当たりにし切迫した心理を描いたルポルタージュ作品であると評価されてきた。しかしこの作品では、甘粕事件や亀戸事件についても言及されている。語り手の恐怖感は、朝鮮人虐殺事件への恐怖とともに、自身が社会主義者として迫害される可能性に根付いているといえることができる。

ここで、社会主義者として描かれることになる語り手の政治思想の推移を確認してみよう。江馬の左傾化と同様、この作品の語り手の思想は、大震災をきっかけに「これまでも増して急進的になり、ずっと左へ傾いてきた」(255)と述べられている。しかし、震災以前から書棚に「レーニンやマルクスの著作」(61)が置いてあり、ロシア革命に期待を寄せているという記述(255)からは、すでにマルクス主義に対する大きな関心を持っていたことがうかがわれる。



震災時には、語り手自身も、社会主義者として暴虐を振るわれる可能性が十分にあった。実際に、長髪の語り手が町を歩いたときには、「おい、長髪だよ。主義者かも知れない、気をつけろ」(143)と言われ、危うく暴力の対象となりかける場面もあり、語り手の恐怖は極度に高まっている。さらに彼は、先に引用したように、新聞に掲載された社会主義者・無政府主義者弾圧事件の情報を得ることで、「魂をどん底まで震撼させ」(252)られる。

しかし、この時点において語り手が新聞で得ている情報は、官憲によってようやく記事の差止めが解禁されたばかりのものであり、未だに事件の全貌を伝えてはいない<sup>39</sup>。また、これらの事件について、「自分は今何にも言うことを控える」(252)と言っている点には、多くの伏字がある中で『台日』に小説を連載している作者自身の検閲への配慮があるだろう。連載小説として伝えたい事実と、新聞に掲載できる事実との間の溝をうかがわせる記述である。

検閲によって言論を慎まなければならないもどかしさは、その後の江馬の執筆活動の姿勢と指針を形成していった。第1節の略歴で示したように、江馬は、『羊の怒る時』発表後に関東大震災での体験をもとにした作品『血の九月』(1947)<sup>40</sup>と『ゆらぐ大地』(1958)を残している。そのどちらもが、『羊の怒る時』では書くことが躊躇された亀戸事件を中心に扱ったものである。『台日』掲載の時点では検閲によって描くことができなかった暴力の真実は、戦後になりようやく発表可能となったのである。

このような江馬の執筆姿勢を考えるならば、『羊の怒る時』連載当時左傾化が進んでいた江馬は、朝鮮人虐殺事件と同様に社会主義者・無政府主義者の弾圧に自分の身の恐怖を重ね合せていたことがわかる。『羊の怒る時』にみられる緊迫感はまた、報道規制という弾圧にも裏付けられているのである。

#### 4. 結論

以上、関東大震災における朝鮮人虐殺事件の群集心理を描いたとされる『羊の怒る時』について、江馬と新聞社との関係性やプロレタリア文学作家としての経緯という側面から、『台湾日日新報』に掲載された事由を考察した。

『台日』に発表された江馬の未発掘作品に注目すると、江馬は1920年前後に台湾日日新報社東京支局記者であった可能性があり、このことが『羊の怒る時』の連載理由の一つであると想定される。さらに、短篇作品「お牧」の内容からは、『台日』における江馬のプロレタリア文学作家としての台頭を見出すことができる。

このような作品発表の背景を考慮するならば、『羊の怒る時』は、朝鮮人虐殺事

件についてのルポルタージュとしてだけではなく、社会主義者・無政府主義者弾圧についての断片的な報告を備えた連載作品であったことがわかる。特に、関東大震災「三大テロル」の一つである亀戸事件について『台日』で言及した唯一の作品として、言論統制の下で限界を感じながらも暴力の実情を伝えた記録として評価できるだろう。『羊の怒る時』に描かれる緊迫感、朝鮮人虐殺の残忍性ととも、社会主義者として迫害されるという危険性、そして連載当時の言論弾圧に対する恐れを映し出しているのである。

## 注

- 1 以下、本稿での『羊の怒る時』からの引用は、1989年出版の復刻版によるものとし、( )内にページ数を示す。引用傍線部は引用者によるものであり、[ ]は引用者による注を示す。
- 2 江馬の経歴については、江馬修『一作家の歩み』（日本図書センター、1989年）、天児直美『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』（春秋社、1985年）、永平和雄『江馬修論』（おうふう、2002年）を参照した。
- 3 大東和重「(書評) 工藤貴正著『中国語圏における厨川白村現象 隆盛・衰退・回帰と継続』」『比較文学』第53巻、129-134頁、日本比較文学会、2011年3月、133頁。
- 4 『山の民』は、1938（昭和13）年の発表以降、1947（昭和22）年、1949（昭和31）年、1958（昭和33）年、1973（昭和48）年にそれぞれ改稿版が出版されている。
- 5 石牟礼道子「存在の根底を照らす月明り——『羊の怒る時』（江馬修）』『群像』第45巻4号、344-345頁、講談社、1990年4月、344頁。
- 6 天児直美『「血の九月」あとがき』『在日文芸 民涛』第8号、380-382頁、影書房、1989年9月、381頁、同『魔王の誘惑 江馬修とその周辺』春秋社、1989年、230頁、永平『江馬修論』前掲書、100頁。
- 7 江馬修は、『羊の怒る時』と同じく関東大震災を題材に描いた『血の九月』（1947）序文において、『羊の怒る時』は「台湾新聞」に掲載されたと述べている（江馬修『血の九月』（上）『在日文芸 民涛』第7号、302-345頁、影書房、1989年6月、302頁）。また、自叙伝『一作家の歩み』（1957）には、「『台湾日報』からたのまれて、初めて新聞に連載小説を書いた」（江馬『一作家の歩み』前掲書、170頁）という記述もみられる。同じく関東大震災について書かれた「ゆらぐ大地」（1964）を所収する小説集『延安賛歌』（1964）の「あとがき」では、「台湾日报社」から連載小説の執筆を依頼されたと言っている（江馬修『延安賛歌』新日本出版社、1964年、270-271頁）。これらの記述を受けて、永平和雄もこの作品の初出を『台湾日報』と誤解していた（永平和雄「江馬修と「血の九月」

『在日芸 民涛』第7号、304-305頁、前掲書、305頁）。

なお、ここで江馬が言及している「台湾新聞」「台湾日報（社）」の概要については以下の通りである。『台湾新聞』（1907-1944）は、1899（明治32）年に設立された台湾日日新報社の台中支社が発行を開始した隔日紙『台中新聞』を前身とし、日本人経営で台湾中部に本社を置く唯一の新聞であった。大正期には輪転印刷機や工場の増設により、台湾日日新報社に次ぐ新聞社として発展した。1944（昭和19）年3月に統合されて『台湾新報』（1944-1945）となり、社屋は台湾新報社台中支社となった。また、『台湾日報』（1897-1898）は、『台湾日日新報』の前身となる新聞であり、1898（明治31）年、台湾日報社・台湾新報社が合併して台湾日日新報社となった（中島利郎編著『日本統治期台湾文学小事典』緑蔭書房、2005年、56-60頁）。

- 8 天児『『血の九月』あとがき』前掲書、381頁、永平『江馬修論』前掲書、114頁。
- 9 李承機「データにみる植民地台湾ジャーナリズムの発展」『アジア遊学』第48号、22-29頁、勉誠出版、2003年2月、23-25頁、波形昭一「解題」台湾日日新報社編『台湾日日三十年史 附台湾の言論界』1-14頁、ゆまに書房、2004年、8頁。
- 10 中島、前掲書、60頁。
- 11 同上。
- 12 連載小説を執筆した作家としては、吉川英治、武田麟太郎、広津和郎、石川達三、尾崎士郎、高見順らがいた（同上）。
- 13 当時、新人作家の長篇小説を書き下ろしとして刊行するのは画期的な出版形態であった。新潮社刊『受難者』の人気を機に、他の出版社でも新人作家の書き下ろし長篇小説が刊行されることになる（天児『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』前掲書、237-238頁）。
- 14 江馬『一作家の歩み』前掲書、142頁。
- 15 台湾日日新報社は、1898（明治31）年の創業後間もなく東京代理店を設置したが、1909（明治42）年に廃止され、京橋区元数奇屋町に東京支局が設立された。この東京支局通信部には記者数名が配属され、内地における政情、経済情勢等が取材された。関東大震災の際に建物が全壊し、その後銀座一丁目に移転した（台湾日日新報社編、前掲書、三〇-三一頁）。
- 16 『台日』夕刊の発行開始日は、1924（大正13）年6月1日である（同上、二十七頁）。
- 17 天児『炎の燃えつきる時』付属「江馬修年譜」前掲書、285-296頁、同「江馬修の著作年表と参考文献目録——その開拓精神と多様な活動を中心に——」『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』第45巻、107-123頁、2000年、永平『江馬修論』付属「著作年表」前掲書、361-380頁。
- 18 江馬『一作家の歩み』、天児『炎の燃えつきる時』、永平『江馬修論』各前掲書。
- 19 長谷川啓「解説」江馬修『阿片戦争』（新・プロレタリア文学精選集10）1-6頁、ゆまに

- 書房、2004年、2頁。
- 20 江馬『一作家の歩み』（前掲書）の記述にもとづき、江馬のプロレタリア芸術連盟への加入は帰国後1927（昭和2）年夏であると考えられていたが、渡欧前の1925（大正14）年10月4日には日本プロレタリア文芸連盟の発起人会に江馬が参加していたことがわかった（永平『江馬修論』前掲書、115頁）。
- 21 天児『炎の燃えつきる時』前掲書、244－245頁、長谷川、前掲書、2頁、永平『江馬修論』前掲書、99－100頁。
- 22 江馬修「お牧」『小説倶楽部』第7号、2－29頁、民衆文芸社、1921年7月、3頁。
- 23 同上、13頁。
- 24 『不滅の像』（1919－20）、『訪るゝ女』（1922）等（永平『江馬修論』前掲書、70頁）。
- 25 江馬『一作家の歩み』前掲書、171頁。
- 26 同上。
- 27 なお、雑誌『種蒔く人』は、震災後の社会主義者および解放運動に対する弾圧により、1924（大正13）年1月号（副題「種蒔き雑記——亀戸の殉難者を哀悼するために」）をもって廃刊となった（小田切進「解説」『種蒔く人 復刻版別冊』8－12頁、日本近代文学館、1961年、8頁）。
- 28 江馬『一作家の歩み』、前掲書、172頁。
- 29 関東大震災における報道規制については、姜徳相『関東大震災・虐殺の記録』（青丘文化社、2003年）、加藤文三『亀戸事件——隠された権力犯罪——』（大月書店、1991年）、山田昭次『関東大震災時の朝鮮人虐殺——その国家責任と民衆責任』（創史社、2011年）を参照した。
- 30 姜、前掲書、270頁。
- 31 以下、「三大テロ事件」についての概要については、姜、加藤、各前掲書、山田昭次編『関東大震災朝鮮人虐殺関連新聞報道史料』第1－4巻・別巻（緑蔭書房、2004年）を参照した。
- 32 山田編、前掲書において収録されている『報知新聞』『時事新報』『東京日日新聞』『国民新聞』『東京朝日新聞』『読売新聞』『法律新聞』『中外商業新報』『中央新聞』『二六新報』『都新聞』『萬朝報』『東京毎日新聞』『やまと新聞』を参照した。
- 33 姜、山田編、各前掲書。
- 34 『台湾日日新報』1923年9月20日第7面。
- 35 10月10日『報知新聞』号外、『東京朝日新聞』夕刊等（加藤、前掲書、215頁）。
- 36 初出の『台日』連載時および単行本（1925）での伏字箇所については、復刻にあたり出版社編集部によって伏字が起され、「朝鮮人」のように「×」のルビを振って表記されている（江馬修『羊の怒る時』（影書房、1989年）「凡例」参照）。

- 37 高尾はアナーキズム系北風会の会員で、労働運動に率先して参加し関係文献の秘密出版にも従事するなど、アナ・ボル論争の両陣に行動派として知られていた。1923（大正12）年6月、赤化防止団長米村嘉一郎宅を襲撃した際にピストルで射殺された（松尾尊兌『大正時代の先行者たち』岩波書店、1993年、201－261頁）。
- 38 「報知」「都」「東京日々」は、それぞれ『報知新聞』『都新聞』『東京日日新聞』を指す。9月1日の地震発生後、『報知新聞』は9月5日、『都新聞』は9月7日（9月2～7日は号外のみ）、『東京日日新聞』は9月3日より再刊していた（山田編、前掲書、第1巻（7）（21）頁、別巻29頁）。
- 39 姜、前掲書、281頁。
- 40 『血の九月』出版の経緯は次のようなものである。この作品は1930（昭和5）年に脱稿しその年の内に出版予定であったが、弾圧を避けるため出版社側から出版が拒否された。その後17年間江馬の自宅に原稿が保存されたが、1947（昭和22）年、在日朝鮮民主青年同盟飛驒支部を通じて非売品として刊行された。これが1989（平成元）年、『羊の怒る時』が復刊されるにあたり、『在日文芸 民涛』の編集員であった李煥成（1935－）の目に止まり、同年6月及び9月に2回にわたって同誌に掲載されることとなった（江馬『血の九月』（上）前掲書、302－303頁）。

## 参考文献

＊江馬修の著作に関しては、初出年を（ ）内に記した。

### 【一次資料】

江馬修『羊の怒る時』（1924－1925）影書房、1989年

### 【二次資料】

天児直美『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』春秋社、1985年

——『『血の九月』あとがき』『在日文芸 民涛』第8号、380－382頁、影書房、1989年9月

——『魔王の誘惑 江馬修とその周辺』春秋社、1989年

——「江馬修の著作年表と参考文献目録——その開拓精神と多様な活動を中心に——」『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』第45巻、107－123頁、2000年

石牟礼道子「存在の根底を照らす月明り——『羊の怒る時』（江馬修）』『群像』第45巻4号、344－345頁、講談社、1990年4月

江馬修『受難者』（1916）『江馬修作品集4 受難者 他』3－316頁、北溟社、1973年

——『不滅の像』新潮社、1919－20年

——「お牧」『小説倶楽部』第7号、2－29頁、民衆文芸社、1921年7月

——『訪るゝ女 五幕の悲劇』新潮社、1922年

- 『極光』上下巻、新潮社、1924年
- 『羊の怒る時』（1924－1925）聚芳閣、1925年
- 『追放』新潮社、1926年
- 『血の九月』（1947）（上）『在日文芸 民涛』第7号、302－345頁、影書房、1989年6月、  
（下）『在日文芸 民涛』第8号、330－379頁、影書房、1989年9月
- 『一作家の歩み』（1957）日本図書センター、1989年
- 『延安賛歌』新日本出版社、1964年
- 「ゆらぐ大地」『延安賛歌』129－206頁、新日本出版社、1964年
- 大東和重「（書評）工藤貴正著『中国語圏における厨川白村現象 隆盛・衰退・回帰と継続』  
『比較文学』第53巻、129－134頁、日本比較文学会、2011年3月
- 小田切進「解説」『種蒔く人 復刻版別冊』8－12頁、日本近代文学館、1961年
- 加藤文三『亀戸事件——隠された権力犯罪——』大月書店、1991年
- 姜徳相『関東大震災・虐殺の記録』青丘文化社、2003年
- ・琴秉洞編『関東大震災と朝鮮人』みすず書房、1963年
- 琴秉洞編『朝鮮人虐殺に関する知識人の反応 2』緑蔭書房、1996年
- 台湾日日新報社編『台湾日日三十年史 附台湾の言論界』ゆまに書房、2004年
- 中島利郎編著『日本統治期台湾文学小事典』緑蔭書房、2005年
- 永平和雄「江馬修と「血の九月」」『在日文芸 民涛』第7号、304－305頁、影書房、1989年6月
- 『江馬修論』おうふう、2002年
- 波形昭一「解説」台湾日日新報社編『台湾日日三十年史 附台湾の言論界』1－14頁、ゆまに  
書房、2004年
- 長谷川啓「解説」江馬修『阿片戦争』（新・プロレタリア文学精選集10）1－6頁、ゆまに書房、  
2004年
- 松尾尊允『大正時代の先行者たち』岩波書店、1993年
- 山田昭次『関東大震災時の朝鮮人虐殺——その国家責任と民衆責任』創史社、2011年
- 編『関東大震災朝鮮人虐殺関連新聞報道史料』第1－4・別巻、緑蔭書房、2004年
- 李承機「データにみる植民地台湾ジャーナリズムの発展」『アジア遊学』第48号、22－29頁、  
勉誠出版、2003年2月